中国語の「主語」をめぐる問題

小川郁夫

0．序
1．主格の語
2．主題の語
3．『中国語教科書』『漢語知識』の問題点
4．「主格」と「主題」
5．まとめ

0．序

現在の中国語文法では，

［1］　中文书，我看。

という文に対して，一般に次のような二通りの分析が行なわれている。

［2］	中文书， 提前された賓語	我　看。 主語　述語
［3］	中文书， 主語	我　看。 述語(主述構造)

［2］は『中国語教科書』[1]，［3］は『漢語知識』[2]に代表される分析法である。このような分析法の相違は，中国語において「主語」なる文法用語をどう定

義するかという点に起因している。

「主語」という文法用語は，中国語文法で現在一般的に用いられているが，その概念規定は明確ではない。『中国語教科書』では「主語」＝「主格の語」とし，『漢語知識』では「主語」＝「主題の語」とする。「主格」とは動作・属性の担い手，「主題」とは陳述の対象のことである。この「主語」の定義の違いが上のような分析法の相違を生ずるのである。

また，

［4］ 他来不来？（彼ハ来マスカ）
［5］ 谁来？（誰ガ来ルノカ）

のような文に対しては両書とも，

［6］ 他（主語） 来不来（述語）？
［7］ 谁（主語） 来（述語）？

と分析する。［4］の〝他〟は「主格の語」であり，かつ「主題の語」であるから，どちらの観点に立っても［6］のような分析となるのは当然である。しかし，［5］に対して［7］のような分析を行なうことには，『中国語教科書』の立場では問題はないが，『漢語知識』の立場では問題が生ずる。何故ならば，〝谁〟という疑問詞のような本来確定していないものが「主題」となることはないからである。［5］の〝谁〟は動詞〝来〟の「主格の語」ではあるが，「主題の語」ではない。「主語」＝「主題の語」の観点に立つ『漢語知識』が［7］のような分析を行なうのは自らの「主語」の定義に矛盾している。

両書は中国における学校文法の二大体系であり，「主語」の問題についても原則的にはそれぞれの観点に立って分析を行なっているが，時として明確な説明が与えられていなかったり，上のように「主格」と「主題」の概念を混同して一貫した分析がなされていなかったりするなどの不備がある。本稿では，「主格」と「主題」の概念を明確に区別した上で，中国語において現在「主語」と呼ばれている文成分について検討してゆく。

1．主格の語

『中国語教科書』をはじめ「主格の語」＝「主語」とする立場では，次の下線部のようなものを「主語」と呼んでいる。

［1］ 我去。（私ガ行ク）[3]
［2］ 他聡明。（彼ガ賢イ）
［3］ 谁来？（誰ガ来ルノカ）

湯川恭敏1971では，ある言語において「主語」なるものが存在するかどうかの規準を次の(1)(2)のように定め，この二つのうち一つでも否定されるのであればその言語には「主語」は存在しないことになる，としている。[4]

(1) 運動や属性の主体であることを専ら示す言語的手段があるか。
(2) その言語的手段は，他の関係をあらわす言語的手段と異なった文法的取扱いを受けているか。

(1)で言う「運動や属性の主体」とは「主格」のことである。「主語」とは「主格の語」が他の語とは異なる特別な機能を有する言語においてのみ意味を持ちうる文法用語であって，ただ単に「主格の語」＝「主語」としただけでは言葉の置換えにすぎなくなってしまう。従って，(1)(2)のような規準で検討してみる必要がある。

上例［1］～［3］の〝我〟〝他〟〝谁〟はその後ろの動詞・形容詞の表わす「運動や属性の主体」である。中国語では，賓格の語は動詞の後ろ，その他の格[5]の語は介詞を用いて動詞の前に置かれる。

［4］ 认识他　（彼ヲ知ッテイル）
［5］ 给你介绍　（アナタニ紹介スル）
［6］ 在这儿工作　（ココデ働ク）

従って，中国語では，ある単語を動詞・形容詞の前に無標識で――介詞等を

用いずに――置くことが「運動や属性の主体であることを専ら示す言語的手段」であると推論することは可能である。しかし，動詞・形容詞の前に無標識で置かれる語は「主格の語」だけではない。

［7］ 我来 （私ガ来ル）
［8］ 下午来 （午後来ル）
［9］ 一定来 （キット来ル）

上例［7］～［9］の如く，動詞の前には「主格の語」［7］のほか，時間詞［8］・副詞［9］も無標識で立つことができる。一般に，［7］の〝我〟だけが「主語」，［8］［9］の〝下午〟〝一定〟など「主格の語」以外の語はすべて「状語（副詞的修飾語）」とされているが，外見上，［7］の〝我〟も［8］［9］の「状語」と何ら相違はない。従って，ある語が動詞・形容詞の前に無標識で置かれるということだけでは，その語を「主格の語」であると判定する言語的手段とはなりえない。よって，湯川の規準(1)は中国語では否定される[6]。

印欧諸言語では，格変化によって「主格の語」を判定することができるので，規準(1)は肯定される。さらに，主格の人称・性・数などの違いにより動詞に語形変化が生ずるため規準(2)も肯定される。しかし，中国語では規準(1)につづき規準(2)も否定される。何故なら，中国語は典型的な孤立語であり，格変化・動詞の語形変化など一切存在しないため，もしかりに規準(1)の「言語的手段」が存在したとしても，その「言語的手段」だけが他と「異なった文法的取扱い」を受けるということがないからである。

［1］～［3］及び［7］の下線部が「主格の語」であると判定できるのは，動詞・形容詞との論理的意味関係によるものであり，統語的な手掛りがあるわけではない。

2．主題の語

『漢語知識』は，序で述べたような問題点が残されてはいるが，中国語の「主語」と「述語」について次のように説明し[7]，「主語」＝「主題の語」とす

る観点に立っている。

主語是謂語陈述的对象，指出謂語説的是誰或者是什么；謂語是对主語加以陈述的，説明主語怎么样。

これと同様な見方をしているものに趙元任1968がある。趙はその中で，中国語の「主語」と「述語」の文法的意味について扱い，中国語では「主語」と「述語」が行為者と行為の関係になっているものは——受身文や〝是〟を用いた文を計算に入れても——中国語の文全体の50％に満たないだろうと述べ，次のように論をすすめている。[8)]

……and the wider conception of topic and comment is much more appropriate. The subject is literally the subject matter to talk about, and the predicate is what the speaker comments on when a subject is presented to be talked about. Thus what is expressed by the subject need not be the performer of the action in an action verb; it need not be equatable to what comes after equational verbs like *sh* 'is'; nor need it have the equality named in a predicative adjective.……

趙はここで次の(1)(2)(3)を根拠に，中国語の「主語」と「述語」は"topic"(「主題」)と"comment"[9)]（「主題」に対する説明）として扱うのが適当であると述べている。

(1) 中国語の「主語」は必ずしも動詞が表わす行為の遂行者ではない。
(2) 〝是〟を用いた文では〝是〟の前と後の語が等しいとは限らない。
(3) 形容詞文の「主語」は必ずしもその形容詞の表わす性質を具えてはいない。

この(1)(2)(3)は，中国語において「主格の語」を「主語」と定義することの無意味さを示すものである。また，"topic — comment" 関係については，

［1］ 午饭已经吃了。（昼ゴ飯ハモウ食ベタ）

［2］ 这个买，那个不买。（コレハ買ウガ，アレハ買ワナイ）
［3］ 我是北京。（私ハ北京デス〔行き先などを答える文[10]〕）

などの文を見れば容易に首肯される。下線部が“topic”，その他の部分が“comment”である。

中国語では日本語と同様[11]，自分がこれから述べようとする対象である「主題」を最初に取りたてて，それについて説明を加えることが多い。［1］～［3］の中国語はいずれもそのような例である。

［4］
甲　你去过中国吗？（アナタハ中国ヘ行ッタコトガアリマスカ）
乙　〔我〕去过〔中国〕。（アリマス）

対話［4］では、「主格の語」〝你〟〝我〟が「主題」となっている。問い甲に対する答え乙は必要最小限の情報（〝去过〟）だけを与えればよい。〝我〟及び〝中国〟は会話者間ですでに了解済みであり，意味的重要性を持っていない。英語では，このような場合，賓語（〝中国〟）が省略されることはあっても，動詞（〝去过〟）の「主格の語」が省略されることはない。ところが，中国語では意味的重要性を持たなくなった要素はすべて――たとえ「主格の語」であっても――省略可能である。中国語の「主格の語」は他の語と異なる特別な機能を何ら有してはいない。

対話［4］のように，中国語では「主題の語」は会話者間の了解があれば容易にふり落とされる。中国語はこの点でも日本語と性質を同じくする[12]。

3．『中国語教科書』『漢語知識』の問題点

『中国語教科書』は「主格の語」＝「主語」という観点に立つため，序で挙げたように，

［1］ 中文书，我看。

の〝中文书〟を「賓語の提前」とする。

中文书,	我	看。
提前された賓語	主語	述語

同書の「賓語の提前」という項[13]では次のような説明がなされている。

(1) 在謂語比較复杂（包括較长的宾語）的句子里，宾語提前可以使句子的結构紧湊、意思清楚。
(2) 提前宾語可以使宾語突出。

しかし，ここで述べられていることは修辞上の問題であって，如何なる条件によって賓語が提前されるかという文法的規則ではない。『中国語教科書』ではそのことについて何ら言及されていない。「賓語の提前」を唱える以上，

［2］ 我看中文书。
［3］ 中文书，我看。

という二つの文は「主述関係」という構文論レベルでは全く等価でなければならないはずであり，そうであるならば，

［4］ 你看什么书？（アナタハ何ノ本ヲ見マスカ）

という問いに対する答えとしては［2］［3］どちらの表現を用いることも可能なはずである。しかし，実際には［3］を使って答えることはできない。

［5］
甲　你看什么书？（アナタハ何ノ本ヲ見マスカ）
乙　我看中文书。（私ハ中国語ノ本ヲ見マス）

［6］
甲　你看什么书？（アナタハ何ノ本ヲ見マスカ）
乙＊中文书，我看。

対話［6］が不成立であることから，［1］の〝中文书〟が単なる「賓語の提

前」によって文頭に置かれたものでないことは明らかである。

『漢語知識』では，「主題の語」＝「主語」という観点から，［1］を次のような「主述述語文」とする。

中文书，　我　　看。
主語　　述語（主述構造）

確かに［1］のような表現は，

［7］　你看中文书吗？（アナタハ中国語ノ本ヲ見マスカ）

といった問いに対して〝中文书〟を「主題」として取りたてる意図で用いられる。

［8］
甲　你看中文书吗？（アナタハ中国語ノ本ヲ見マスカ）
乙　中文书，我看。（中国語ノ本ハ私ハ見マス）

『漢語知識』の立場では，［8］甲は，

你　看中文书吗？
主語　　述　語

となる。従って，［8］甲に対して，

［8］′乙　我看中文书。（私ハ中国語ノ本ヲ見マス）

と答えれば，

我　看中文书。
主語　　述語

のように〝我〟が「主語」（「主題の語」）となるはずである。それなのに，［8］

乙のように〝中文书〟を「主題」として文頭に取りたてると，〝我〟が述語の中にはいってしまうのは何故であろうか。

[9] 甲　你看中文书吗？（アナタハ中国語ノ本ヲ見マスカ）
　　乙　我看〔中文书〕。（私ハ〔中国語ノ本ヲ〕見マス）

[10] 甲　你看中文书吗？（アナタハ中国語ノ本ヲ見マスカ）
　　乙　〔中文书，〕我看。（〔中国語ノ本ハ〕私ハ見マス）

対話[9]及び[10]の乙は〝中文书〟をあえて繰返さなくてもよい。繰返さない場合は，どちらの文も同じ〝我看〟という表現になり，全く同じ意味である。ところが，『漢語知識』の分析によれば，[9]乙の〝我看〟が「主語」＋述語であるに対し，[10]乙の〝我看〟は全体が述語である。[10]乙で〝中文书〟が繰返されていなければ〝我〟を「主語」とするのであろうか。これは文頭にある語を「主語」としているだけで，余りにも形式的である。対話[9][10]の下線部はすべて「主題」となっている。[10]乙のような文は，「主題の語」が二つある文と考えるのが妥当である。

『漢語知識』の「主語」の説明について，もう一つ不明確な点がある。「疑問代詞」という項に[14]，

疑問代詞……有的可以作主語……

という説明があり，

[11] 谁代表我們学校去参加会議？（誰ガ我々ノ学校ヲ代表シテ会議ニ参加スルノカ）
　　主語

という例文が挙げられている。文頭に立つ「主格の語」は必ずしも「主題の語」になるとは限らない。もっとも，「主格の語」と「主題の語」が一致する場合は極めて多い。

[11]の疑問詞〝谁〟は，動詞〝代表〟及び〝去参加〟の「主格の語」ではあるが「主題の語」ではない。「主題」とは話のテーマ（話題）のことであり，疑問詞など本来確定していないものが「主題」となることは絶対にありえな

い。何故ならば，確定していないものに対して何らかの説明を加えることは不可能だからである。[11]の〝谁〟を「主語」とするのは『漢語知識』自らの「主語」の定義に矛盾するものである。

4．「主格」と「主題」

三上1953では「主格」「主題」「主語」の概念を次のように説明している。[15]

主格――nominative case
主題――theme （一般用語）
主語――subject （文法専用語とする）

主格は第一格，すなわち動詞に対する論理的諸関係を表わす諸格中の第一格であって，用法に少しずつ出入はありながらも，だいたいは国際的に通ずる概念である。主題も言語心理に普遍的な概念と言ってよかろう。どちらもあらゆる国語に適用することができる。しかし主語はそうではない。主語は，主格が或る特別なはたらきをする国語において，その主格に認められる資格，としか考えられないものである。

引用のように「主格」と「主題」はあらゆる言語に普遍的な概念である。しかし，「主語」はそうではない。「主語」という文法用語は中国語文法でも現在一般的に用いられているが，「主格の語」あるいは「主題の語」を単に「主語」と置換えているだけである。これまで述べてきたように，中国語では「主格の語」が述語に対して特別な働きをするわけではない。従って，「主語」という術語は中国語文法では不必要であるということになる。

「主語」という術語のかわりに「主格」「主題」という概念を用いて中国語の文を分析するとどうなるであろうか。

[1] 甲　老吴来不来？（呉サンハ来マスカ）
　　乙　〔老吴〕来。（〔呉サンハ〕来マス）

[2] 甲　午饭已经吃了吗？（昼ゴ飯ハモウ食ベマシタカ）
　　乙　〔午饭〕已经吃了。（〔昼ゴ飯ハ〕モウ食ベマシタ）

[3] 甲　你会说中国话吗？（アナタハ中国語ヲ話スコトガデキマスカ）
　　乙　〔中国话，我〕不会说。（〔中国語ハ私ハ〕話スコトガデキマセン）

[1]甲の〝老吴〟は動詞〝来〟の「主格の語」であり，かつ「主題の語」である。乙の〝老吴〟は意味的重要性を持たず，省略可能である。[2]甲の〝午饭〟は動詞〝吃〟の「主格の語」ではなく，賓格の語である。賓格の語は本来動詞の後ろに置くが，これが文頭に立っているのは「主題」として取りたてられているからである。乙の〝午饭〟はやはり意味的重要性を持たず省略可能である。[3]では「主格の語」である〝你〟〝我〟が「主題」となっているだけでなく，甲では賓格の語であった〝中国话〟が乙で「主題」として取りたてられている。[3]乙の〝中国话〟〝我〟はどちらも省略可能であるが，両方ともあえて繰返した場合，[3]乙は「主題」が二つある文になる。

以上の例を見ると，中国語の構文は「主題の語」＋述語ととらえると都合がよさそうである。

次の例はどのように分析されるであろうか。

[4] 甲　谁来？（誰ガ来マスカ）
　　乙　老吴来。（呉サンガ来マス）

甲の疑問詞〝谁〟が動詞〝来〟の「主格の語」ではあるが，「主題の語」ではないことはすでに述べた通りである。

意味をつきつめて考えれば，対話[4]の「主題」は〝来〟である。このような文について，三上1953は英語“Henry has arrived.”の日本語訳を対話の中に示して次のように説明している[16]。

——扁理ハドウシタ？
——扁理ハ到着シマシタ　　（顕題）
——誰ガ到着シタ？
——扁理ガ到着シタンデス　（陰題）

問と答に共通な成分が主題である。顕題では「扁理」が主題であり，陰題では「到着」が主題である。

先の対話[４]は三上がここで言っている陰題の文にあたり，「主題」は〝来〟にある。三上はさらにもう一つの場合として，

——何カにゅうすハナイカ？
——扁理ガ到着シマシタ　　（無題）

を挙げ，陰題と区別している。中国語でも当然このような無題の場合を想定しうる。しかし，陰題の文も無題の文も言語の表現形式としては同じであり，どちらも文頭に「主題の語」のない文として扱うことができる。

中国語の構文の枠組を「主題」＋それに対する説明ととらえるならば，説明にあたる部分が述語である。従って，「主題の語」のない文，または省略された文は，全体が述語からなる文である。対話[４]の文はどちらも「主題」が顕題の形で現われてはいない。この二文は全体が述語からなる文である。

しかし，[４]甲の〝谁来？〟のような発話は突然なされることは決してなく，何らかの前提が会話者間に存在するはずであるから，「主題」をそこに求めることもできる。

[５]
甲　明天谁来？（アスハ誰ガ来マスカ）
乙〔明天〕老吴来。（〔アスハ〕呉サンガ来マス）

対話[５]の「主題（顕題）は〝明天〟であり，乙では了解済みであるからあえて繰返す必要はない。

ところで，[４][５]乙の〝老吴来〟は〝老吴〟とだけ言えば十分用を足す。これは，問いを発した甲の要求している未知の情報が〝老吴〟だけであり，意味の重点がそこにあるからである。〝来〟は三上の言う陰題であり，会話者間の了解により省略可能である。従って，対話[４]は，

[6] 甲　谁来？（誰ガ来マスカ）
　　乙　老吴。（呉サン〔ガ〕）

でもよい。また，乙に話し手の判断を加えて，

[7] 甲　谁来？（誰ガ来マスカ）
　　乙　是老吴。（呉サン〔ガ〕デス）

としてもよい。[7]乙の〝是〟は判断詞とでも呼ぶべきものである。対話[4]は，この判断詞〝是〟を使って，

[8] 甲　是谁来？（誰ガ来ルノデスカ）
　　乙　是老吴来。（呉サンガ来ルノデス）

のようにして，話し手が何を聞きたいのか，何を述べたいのかの判断を加えることができる。[8]甲乙のような〝是〟で始まる文は，明らかに全体が述語からなる文である。

対話[4]と次の対話を比較してみよう。

[9] 甲　老吴来不来？（呉サンハ来マスカ）
　　乙　老吴来。（呉サンハ来マス）

対話[9]の「主題」は〝老吴〟である。甲は「主題」〝老吴〟について〝来〟か〝不来〟かの選択を求めているのである。乙は〝来〟という甲にとっては未知の情報を与えている。[9]乙で意味的に重要なのは〝老吴〟ではなく〝来〟である。これに対して，先の対話[4]の乙では，〝来〟ではなく〝老吴〟が意味的重要性を持っている。対話[4][9]は，

[4]′ 甲　谁来？（誰ガ来マスカ）
　　乙　老吴〔来〕。（呉サン〔ガ来マス〕）

[9]′ 甲　老吴来不来？（呉サンハ来マスカ）
　　乙　〔老吴〕来。（〔呉サンハ〕来マス）

のように意味的に重要でない部分を省略することができる。同じ〝老吳来〟にこのような違いが生ずるのは，話し手の判断の対象が異なっているためである。判断詞〝是〟を[4][9]の乙に挿入すると，

[4]″乙　是老吳来。(吳サンガ来ルノデス)
[9]″乙　老吳是来。[17] (吳サンハ来ルノデス)

となり，構文としてのはっきりとした相違を示すことができる。この二つの文は次のように分析できる。

[4]″乙　<u>是老吳来</u>。
　　述語

[9]″乙　<u>老　吳</u>　　<u>是　来</u>。
　　「主題の語」　述語

従って，[4][9]の乙についても，

[4] 乙　<u>老吳来</u>。
　　述語

[9] 乙　<u>老　吳</u>　　<u>来</u>。
　　「主題の語」　述語

のように分析すべきである。同じ〝老吳来〟でも〝老吳〟と〝来〟をつなぐ関係は[4]乙と[9]乙では異なる。[4]乙は全体が述語であるため，〝老吳〟と〝来〟は修飾・被修飾という緊密な結びつきをしているのに対して，[9]乙では，「主題」とそれに対する説明（述語）という大まかな結びつきをしている。[18]

5．まとめ

以上見てきたように，中国語では「主題の語」＋述語で一文が完成することが多い。文頭に「主題の語」がなければ，その文は全体が述語からなる文である。三上1953は日本語の文を「主題」＋「解説」ととらえ，「主題」は既知，「解説」は未知，重点はいつも「解説」にある[19]，としている。

［1］ 那本书已经看了。（アノ本ハモウ読ンダ）
［2］*一本书已经看了。

［1］のように指示詞〝那〟をつけた〝那本书〟は既知のものであるが，［2］の〝一本书〟は不特定のものであるから既知扱いとはならない。従って，〝那本书〟は「主題」となれるが，〝一本书〟は「主題」となることはできない。

「主題」は既知であるから最初から述べられない場合もある。例えば，相手をうながして，

［3］ 走吧。（行キマショウ）

と言えば十分意味は通じる。わざわざ「主題」を添えて，

［4］ 我们走吧[20]。（私タチハ行キマショウ）

と言わなくてもよい。

中国語では一般に，疑問詞を除き未知の成分は文頭に立たない。「人ガヒトリ来タ」という事態を中国語で表現する場合も，

［5］*一个人来了。

とは言えず，

［6］ 有一个人来了。

のように「主格の語」〝一个人〟の前に動詞〝有〟を加えるか，または，

［7］ 来了一个人。

のように〝一个人〟を賓語の位置に置いたりして，全体を述語の形式にしなければならない。これは，〝一个人〟が不特定のもの，つまり未知のものであり，「主題の語」の位置に立つことができないからである。この例のように，中国語では「主格の語」でさえ文頭に立つことのできない場合もある。中国語の構文の枠組は「主題の語」＋述語であって，「主格の語」＋述語ではない。

注

1）原名『漢語教科書』，北京大学外国留学生中国語文専修班編1958。

2）原名『初中課本・漢語』1956。

3）日本語で格を考える場合には，〝ハ〟よりも〝ガ〟の方が都合がよい。日本語の〝ハ〟は係助詞であり，〝ガ，ノ，ニ，ヲ〟などの格助詞を代行するからである。三上章1960参照。

4）湯川1971，161頁。

5）例文［5］の介詞〝给〟は受益者の格を表わし，［6］の介詞〝在〟は所の格を表わす。

6）望月八十吉1974，48－67頁に，「主語」（望月は「主格の語」と「主題の語」を包含させている）と「連用修飾語」（ここで言う状語）の区別は語形自身が標識となって可能であるという記述があるが，その曖昧さについては望月も認めている。本稿では「主格の語」と「主題の語」を厳密に区別した上で，動詞の前という位置だけでは「主格の語」を判定する手段とはならないと述べているのである。

7）采華書林発行1976，118頁。

8）趙1968，69－70頁。

9）趙1968には呂叔湘による中国語訳『汉语口语语法』（商务印书馆1979）があり，

“topic”と“comment”に対して「話題」と「説明」の訳語があてられている。(45頁)

10) 次のような対話の中に入れると適格文となる。

甲　我去南京。你呢？（私ハ南京ヘ行キマスガ，アナタハ？）
乙　我是北京。（私ハ北京デス）

これは奥津敬一郎1978の「うなぎ文」に近い。

11) 三上1953，1959，1960など参照。

12) 久野暲1978参照。

13) 光生館発行1960，上巻221－222頁。

14)『漢語知識』83頁。

15) 三上1953，73頁。

16) 三上1953，81－82頁。

17) 一般には〝是〟を入れないが，あえて入れると「呉サンハ確カニ来ルノダ」のような意味になる。

18) 三上1960，24頁に

「ハ」は大きく大まかに係る。
ガノニヲは小さくきちんと係る。

とあるが，これは日本語の「主題」が述部に大まかに係るのに対し，ガノニヲなどの格を表わす語が述語（動詞や形容詞）だけに緊密に係ることを述べたものである。

19) 三上1953，80－81頁。

20) 日本語ではもっぱら「行キマショウ」を用い，わざわざ「私タチハ」を添えないが，中国語では[4]も[3]と同じくらいによく使う。このような「主題」について，中国語は日本語ほど会話者間の了解に依存しないようである。

文献目録

『中国語教科書』（1960年光生館による）。
『漢語知識』（1976年采華書林による）。
湯川恭敏1971，『言語学の基本問題』。大修館書店。
望月八十吉1974，『中国語研究・学習双書13，中国語と日本語』。光生館。

趙元任1968，A Grammar of Spoken Chinese. University of California Press, Barkeley and Los Angeles.
赵元任著，吕叔湘译1979，『汉语口语语法』。商务印书馆。
三上章1953，『現代語法序説』（1972年くろしお出版による）。
三上章1959，『新訂版現代語法序説』（1972年『続・現代語法序説』くろしお出版による）。
三上章1960，『象は鼻が長い』。くろしお出版。
久野暲1978，『談話の文法』。大修館書店。
讃井唯允1974，「中国語文法の機能概念(I)」，『人文学報』（都立大）98。
北原保雄1981，『日本語の世界6，日本語の文法』。中央公論社。
大河内康憲1982，「中国語構文論の基礎」，『講座日本語学』。明治書院。
宮田一郎1978，「主語か主題か」，『中国語』3月号。大修館書店。
奥津敬一郎1978，『「ボクハウナギダ」の文法』。くろしお出版。